『明治と讃美歌　明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相』要旨

手代木俊一

『明治と讃美歌　明治期プロテスタント讃美歌・聖歌の諸相』は、讃美歌をとおして明治期（一部幕末）の日本の音楽、言語、文化、社会を描き出し、同時に日本の近代化における讃美歌の果たした役割についての論考である。構成は以下 7 章である。

第 1 章　勝海舟と讃美歌　時代は蘭学から英学へ
第2章　ゴーブルと讃美歌　英語讃美歌から日本語讃美歌へ
第3章　C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌）　初期讃美歌の成立と他教派との協力関係
第4章 来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌
第5章 日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教
第6章 植村正久と讃美歌　日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』
第7章 島崎藤村、樋口一葉と讃美歌　キリスト教と詩歌　86 調と 75 調

「第 1 章　勝海舟と讃美歌　時代は蘭学から英学へ」では、明治期の前史である幕末、オランダ語から訳された讃美歌について触れ、勝海舟がなぜ讃美歌を翻訳したのか、そして勝海舟とキリスト教との関係を検証する。「第 2 章　ゴーブルと讃美歌　英語讃美歌から日本語讃美歌へ」では、記録に残る最初の日本語讃美歌の翻訳者であるゴーブルの讃美歌を取り上げ、宣教師のアジアにおけるネットワーク、75 調、ヨナ抜き 5 音階、頭韻脚韻について言及する。「第 3 章　C. M. ウィリアムズと聖歌（讃美歌）　初期讃美歌の成立と他教派との協力関係」では、C. M. ウィリアムズが翻訳した讃美歌から他教派との協力関係を考える。「第 4 章　来日宣教師の社会事業（盲人教育）と讃美歌」では来日宣教師と社会事業、ここでは讃美歌と盲人教育に関して取り扱う。「第 5 章　日本の讃美歌、唱歌、及び替歌（南北戦争の歌）と 19 世紀アメリカの海外宣教」では、日本の近代音楽、特に唱歌と讃美歌を 19 世紀アメリカの海外宣教と音楽との関わりで論じ、替歌と讃美歌との関連にも触れる。「第 6 章　植村正久と讃美歌　日本人最初の讃美歌論と『新撰讃美歌』」では、明治の讃美歌史は 5 教派統合の明治 36 年版『讃美歌』へ各教派の讃美歌が収斂していく過程が中心であるが、その前段階である明治 21 年『新撰讃美歌』に関った植村正久と彼の讃美歌論を紹介する。「第 7 章　島崎藤村、樋口一葉と讃美歌　キリスト教と詩歌　86 調と 75 調」では、島崎藤村、樋口一葉の詩歌と讃美歌との関連、讃美歌から受けた影響について扱い、キリスト教との関係、86 調と 75 調について検討する。